発行日：July 13, 2023

Newsletter

日本IPBAの会

お問い合わせ：日本IPBAの会　c/o IPBA事務局　東京都港区六本木6-2-31 六本木ヒルズノースタワー7F
Tel. 03-5786-6796 Fax. 03-5786-6778 E-mail: ipba@tga.co.jp Website: http://ipbajp.com

IPBA 第31回ドバイ大会

2023年3月7日～10日
JW Marriott Marquis Hotel Dubai

久し振りの国際会議とドバイ

IPBA元President、日本IPBAの会会長
国谷　史朗（弁護士法人 大江橋法律事務所）

1.　多くの再会とドバイの賑わい

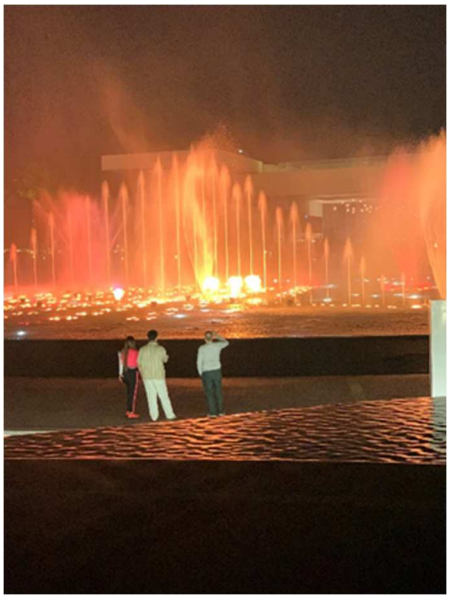
コロナで約3年間国際会議から遠ざかっていたので、とにかくリアルの国際会議は楽しかった。誰もマスクはしないので割り切ってマスクはしなかったが、幸いコロナには罹らなかった。予想を大幅に超える700人以上の参加者があり、日本からも70人ほどが参加、久しぶりの国際会議ということで大いに盛り上がった。

ドバイを訪れるのは3回目。1回目はIPBAの中間理事会、2回目はIBAの年次大会参加のためだった。過去2回とも、最初のウェルカムレセプションは砂漠の真ん中の会場で、飲み物・食べ物が乏しく、3回続けて同じ場所ならどうしようかと心配していた。幸い、同じ場所ではなかった。マリオットホテルのレセプション会場で、宗教的理由からか、（女性ではなく）男性20人くらいが棒を持って単純な動作の踊りを披露されたのが印象的だった。

フェアウェルパーティーは7つ星ホテルとして有名なブルジュ・アル・アラブ・ジュメイラホテルがすぐそこに見えるジュメイラビーチホテルの屋外会場で、ドバイらしい雰囲気が楽しめた。久しぶりのドバイだったが、市内の交通渋滞がひどくなっていたこと、高速道路と並行して走る列車を利用する人が増えているように思えたことなど、ドバイにも都市化の波が押し寄せていると感じた。

2.　Past President Dinner

会長経験者が旧交を温めあう会として前々回のシンガポール大会から始まったものだが、第2回目として開催された。Host committee chairのRichard Briggsが、高級ホテルが立ち並ぶパームジュメイラの中でも最も注目を集めているという最新のホテル、Atlantis The Royalで夕食をアレンジしてくれた。彼の奥さんの古くからの知り合いの女性シェフで、現地で話題になっているイラン料理店だった。このホテルの敷地内には数十メートルも吹き上がる噴水を見せる広大な場所があり、噴水を見ながらテラスでドリンクを楽しんだ。（このホテルの一番高い部屋は1泊270万円だそうです。）



Past President Dinner会場ホテルの噴水　　写真：筆者提供

3.　中東の砂漠でのゴルフ

年次大会のゴルフには、参加しようと思いながらなかなか参加できず、はるか昔に台湾で参加して以来2回目の参加となった。中東の砂漠のど真ん中でゴルフをすることもあまりないだろうと思い申込をしたところ、同じように思った人も結構いたようで、他の日本人を含め40人くらいが参加していた。バスに揺られながら砂漠の中を進むと、突然芝生の敷地が現れた。ジュメイラ　ゴルフエステートで、綺麗に整備されたコースだった。残念ながら時間切れで私は15ホールまでしかプレーできなかったが、クラブカーで見て回った残りの16、17、18ホールはとても美しく、最後までプレーできなかったのが本当に残念だった。

（ゴルフの組み合わせはあらかじめ決められておらず、レンタルクラブも30分以上待たないと揃わず、スタートまで1時間くらい待たされたのには閉口した。日本ではありえないアレンジのおかげで最後までホールを終了できなかった。）

4.　セッションへの参加

プリナリーセッションその他のセッションには真面目に参加した。コロナや緊迫した世界情勢を背景にサプライチェーンの問題を取り上げるセッション、EV関連のセッション、紛争解決や投資関連のセッションなど。参加者数に比べてセッション参加者は少ないように感じたが、観光や、メンバーと旧交を温めたりしている人などが多かったのではないかと思われる。

コロナ期間中は多くのWebセッションに参加したが、やはり実セッションでのスピーカーの話やオーディエンスの反応など、良い刺激があった。

5.　2024東京大会の事前登録受付－予想を越える盛り上がり

東京大会に向け、日本のホストコミッティーメンバーがスーパーアーリーバードの登録受付窓口を手分けして担当した。久しぶりの日本での年次大会への期待はとても大きく、200人を大きく超える登録があったのには驚いた。ホストコミッティーでは、1200人を大幅に超える参加者があったら会場で収容しきれない恐れがあるがどうしようかというう れしい心配もささやかれていた。

大会会場のJW Marriott Marquis Hotel

写真：筆者提供

私にとってIPBAの年次大会は毎年欠かせない行事だが、久しぶりのIPBA大会への参加で、日常が戻ったと感じた。

IPBA2024年東京大会に向けて

IPBA President-Elect
石黒　美幸（長島・大野・常松法律事務所）

IPBAメンバーの皆さん、こんにちは。

3年以上続いたコロナ禍もようやく終息の兆しが見え始め、IPBAの年次大会も紆余曲折の末、2019年のシンガポール大会以来4年ぶりに完全リアル参加形式でアラブ首長国連邦（UAE）のドバイでこの3月に開催されました。

直前までコロナ禍の影響がよく見通せなかったこともあってか、ドバイ大会の登録者数は2023年2月になってもあまり積み上がらず、ホストコミッティは、大会運営収支が赤字にならないか、相当気を揉んだようですが、最後の追い上げがすさまじく、最終的には58の法域からの700名を超える登録者数を達成しました。IPBAの仲間にWEBではなくリアルで会いたいと熱望する会員が数多くいたということかと思います。参加上位の法域は、UAE78名、日本70名、中国68名、インド63名、シンガポール60名（日本人会員を含む）でした。

さて、ドバイの気候とイスラム教のラマダンの時期を考慮の上、通例となっている4月ではなく3月初旬開催となりましたが、そのお陰である程度快適な環境での開催となりました。会場は、ドバイのビジネス地区にあるJW Marriott Marquis Hotel Dubai（マリオット）であり、参加者の多くも同じホテルに滞在していたようですので、移動も少なくとても便利でした。マリオット以外に宿泊された参加者は、時間帯によっては激しい交通渋滞に巻き込まれ、集合時間に大幅に遅れるといったトラブルもあったようですが、それほど大きな問題は発生しなかったようです。時間に対しては、ある程度おおらかお国柄なのかもしれません。

ドバイ大会の公式スケジュールは伝統的なIPBA の年次大会のスタイルを踏襲し、初日は昼間にゴルフトーナメントが開催され、夕方4時からはマリオットで女性会員向けレセプション、続いて新入会員とスカラー向けレセプションが開催され、多くの友達や仲間が集まりました。皆さん、久しぶりの再会を心から喜んでいて、大きな声でしゃべり、笑って、抱き合い、乾杯して、とそれはそれは大変な盛り上がりようであり、レセプションの司会者の声も聞こえないくらいでした。その後は、マリオットのプールサイドでウェルカムレセプションでしたが、ここでもあちこちでハグや乾杯が繰り広げられ、異様な盛り上がりでした。折角のダンスや余興を真面目に見ていた人はどの位だったのか疑問です。

2日目はオープニングセレモニーに始まり、午前中はKeynote Session、Plenary Sessionと続きましたが、お国柄か女性の登壇者は少なく、話題も今はやりの「ダイバーシティ＆インクルージョン」等は避けていた模様です。午後からは、委員会主催のセッションが始まりました。夕方は、マリオットで盛大なガラ・ディナーでしたが、ディナーの後は夜の街に繰り出して夜中まで踊り狂う（by 中山CEO（注：Chief Entertainment Officer））ではなく、なぜかホストコミッティのメンバーの事務所の設立何十周年か記念パーティに誘導され、それはそれで楽しかったです。ガラ・ディナーでも、記念パーティでも、日本では見たことのないクルクル回る装置に立って、スマホで写真や動画を撮ってもらいました。

3日目は朝から夕方まで委員会のセッションが開催され、夕方は郊外のJumeirah Beach Hotelという有名なリゾートホテルの広大な庭でフェアウェル・パーティでした。屋外でしかもあまり明るくない場所でのディナーでしたが、初めて会う会員とも同じテーブルを共有して、大いに盛り上がりました。

Farewell Dinner にて

写真：筆者提供

最終日は、午前中に委員会主催のセッションがあり、その後ランチを食べながらの定時総会が開かれ、重要議題を審議しました。

盛会のうちにドバイ大会は閉会しましたが、今回は、久しぶりのリアル開催ということもあってか、参加者の多くは委員会のセッションに真面目に参加するというよりは、夜のソーシャルイベントを楽しんだり、昼間も友達とランチしたりお茶したり観光に出かけたりとうことに重点を置いていたように見受けられました。これも3年以上会えなかった友達と久しぶりに会えた貴重な機会だったため、仕方のない現象だったのかもしれません。

ドバイ大会では東京大会用の登録ブースを設けて登録申込の勧誘に勤しんできました。東京が大好きな会員が多いのか、私達の必死の勧誘が効を奏したのか、200名以上のドバイオンサイト登録を達成することとなり、東京大会にとってはとてもよい滑り出しとなりました。

さて、東京大会ですが、2024年4月24日（水）から始まります。場所はホテルオークラです。参加登録は既に始まっていますので、東京大会のHPにアクセスの上、お早めにご登ください。また、日弁連が若手弁護士向け（応募締切日時点で会員登録後13年以内）に10万円の補助を支給するプログラムを設定してくださいました（上限100名）ので、資格のある若手会員の皆様は是非ご利用ください。それでは、来年4月の東京大会の成功に向けて、皆さんと一緒に盛り上がりましょう！！

エネルギッシュ・ドバイ

IPBA 日本代表理事
増田　健一
（アンダーソン・毛利・友常法律事務所）

ドバイに行ってきました！ドバイはおろか中東にも行ったことがありませんでしたので、このたびのIPBAへの参加を楽しみにしていました。

実際に目にしたドバイの中心部は、「何だ、これ」でした。さまざまな形の（中には、とても不思議な形の）高層ビルが雨後の筍のよう（写真1）。特に、世界一の高さを誇るブルジュ・ハリファは、その前面に人口の池が作られ、夜には、レーザー光線を用いたイルミネーションとともに、高さ世界2位（らしい）の噴水を噴き出していました（ドバイファウンテン・写真2）。

加えて、あちらこちらでまだまだビルの建設が続いています。オフィスと住居のようですが、一体そんなに需要が続くのでしょうか。水族館やアイススケートリンクも備えた世界一のショッピングモールがあり、美しく整備の行き届いた芝生のゴルフ場が都心ほど近くにあり、大量の水を噴き上げる噴水があり、人工スキー場があり。。。砂漠じゃなかったの？　SDGsは？？　お金さえあれば人間の技術力で何でもできてしまうことの証左のように思えました。でも、「世界一」などといわれると、つい見に行きたくなってしまうんですよね。

写真１（上）写真２（下）　筆者提供

他方、ドバイの街で見かけた人々はとても多様で、コロナ禍でここ数年ほとんど日本人にしか接してこなかった私の眼には新鮮でした。ドバイファウンテンの噴水ショーはさまざまな国からの観光客で超満員。アブダビへのツアーでは、サウジアラビア、アメリカ、韓国、中国、アフリカから来た人たちと一緒でした。ダウンタウンからドバイメトロで20分ほど西へ行ったところにあるビーチエリアには、海岸沿いに大変オシャレな高級タワーマンションが立ち並んでおり、ビーチでは、主として白人の男女が短パンやビキニで日光浴をしていました

が、その横を真っ黒なイスラムの衣装で全身を覆った女性たちが歩いていました。ダウンタウンから東の方にあるオールドドバイと呼ばれている地域には、庶民的な街並みが広がっていて、外国人労働者と思われる人たちを多く見かけました。電車の中では、多くの人がスマホのスピーカーで電話をしていたりスピーカーから音楽を聴いていたりしましたが、女性には率先して席を譲っていて、総じて親切な印象を受けました。これが経済（マネー？）の力ということなのかもしれませんが、ドバイには活気があふれていて、エネルギッシュな推進力と人を惹きつける魅力を十分に感じました。

ドバイ大会は、人との直接のふれあいの価値に改めて気付かされるとても印象深いものでした。事務局からいただいた情報によると、58の法域から719人の参加者があったそうです。参加の多い順に、UAE 78名、日本 70名、中国 68名、インド 63名、シンガポール 60名だったとのこと。ディナー会場で、さまざまな国からの出席者をマスクなしに見るだけでも、コロナが終わったこと、これから新たな国際的な交流が始まることを期待せずにはいられませんでした。4年ぶりに多くの顔が集まり、懐かしい顔との再会を喜び、とても愉快な時間を過ごすことができました。ただ、歳のせいか、とっさに名前が出てこないのが少しばかり情けなくもありましたが。そして、改めて、マスクをせずに直接顔を見ながら話ができることの大切さと有難さを強く感じました。

ドバイ大会の際に、来年の東京大会の申込みブースを作りました。ただ待っていても人が集まりそうになかったので、セッションの休憩時間に東京大会のビラを持って知らない人に思い切って声をかけてみました。その結果、何人か、ブースまで案内して申込み手続きをしてもらうことに成功。キャッチセールスみたいでしたが、知らない人に話しかけ名刺交換をするきっかけにもなり、東京の宣伝もでき、面白いチャレンジでした。来年の東京大会にはもっと多くの人たちに参加いただけるよう、そして参加いただいた皆さんに日本の良さを感じて帰ってもらえるよう、切に願っています。

現地視察と自分に言い訳をして観光に明け暮れたドバイでしたが、実に有意義でした。ホテルでハウスキーピングの際に置いてくれていたチョコでくるんだデーツ（ナツメヤシのドライフルーツだとか）がおいしかった!!

久しぶりのIPBA年次総会

Banking, Finance and Securities Committee Co-Chair
鈴木　由里
（渥美坂井法律事務所・外国法共同事業）

写真：筆者提供

1. Committee Chairとして

私は2017年のオークランド大会から金融分野のセッションに登壇するようになり、2020年からBanking, Finance and Securities Committee のVice Chair、2022年からスイスのCatrina Luchsinger弁護士と共にCo-Chairをしています。CommitteeのVCの方達も含め親しくなり、パンデミックの間は対面で話す機会がなかったので、ドバイ大会で3年ぶりに顔を合わせることができ、皆で喜びました。残念だったのは、例年は他のメンバーの方も含めたCommittee Meetingをしていたのですが、今年は会場の関係で、人がうまく集まることができませんでした。それでも、ChairとVCで集まり、近時の金融分野における話題、お互いの国の状況について情報交換をすることができたので、大変有意義でした。

2. セッション・モデレーターとして

2日目午後一番から始まるSession 1の枠でAnti-Money Laundering (AML) procedures post Crypto and COVID, how to deal with globalization and remote identificationというセッションのモデレーターを務めました。マネロン対策も厳格になる一方であり、さらに暗号資産も相変わらず関心の高い分野であるせいか、大変広い会場を割り当てていただき、とても緊張しました。登壇者にはドバイ警察の方が来て下さり、監督側の目線でプレゼンテーションをしていただけたのは非常に貴重で有益でした。マネロン対策も暗号資産もクロスボーダーで問題となりますが、各国で取組が進んでいる様子を国際会議の場で共有できた意義はあったのではないかと思います。

3. ネットワーキングのメリット

国際会議では、セッションで国内外の知識を得ることも有益ですが、セッションの登壇者と直接お話ししたり、合間のコーヒーブレイク、Japan Night等のレセプション、ディナーで色々な国の弁護士とネットワーキングすることが楽しみです。IPBAは程よい規模で、アジアからの参加者が多く、英語を話すには気が楽な環境なので、若手弁護士の方も緊張する必要はなく、楽しんで交流されるとよいと思います。私の初IPBA年次総会は2016年のクアラルンプール大会で今回が５回目の参加になります。毎回一定数は同じ顔ぶれの方が参加しているので、回数を経るごとに親しくなる弁護士が増えるという印象です。また、今回はたまたまArt Lawの知識がほしかったので、関連セッションのパネリストの方と知り合うことができ、大変貴重なご縁をいただいたと思っています。そうした自分なりのコンタクト先を開拓することができるのも国際会議の大きなメリットです。

4. はじめて中東を訪れて

中東の国を訪問するのも初めての経験で、前々からかなり楽しみにしていました。反面、ドバイは開放的とはいえイスラム教国。イスラム教における女性への考え方は日本人には理解し難いものがあり少し心配でした。しかし、ホテルやショッピングセンターなど旅行者が多い場所では服装も自由であり、場所にもよるのでしょうが心配は無用とわかりました。帰国便では名画「アラビアのロレンス」を視聴し、そこで描かれていた砂漠での生活、部族間の争いが印象に残っています。超高層ビル群に象徴される現在のドバイも砂漠に人工的につくられた都市。砂漠といえば水が問題ですが、ドバイには噴水ショーもあり水は豊富なように見えます。ドバイの水道水は海水淡水化によりつくられており、日本企業の技術が役立っているそうです。

初めてのIPBA

屋嘉　まりあ　（北浜法律事務所）

弁護士3年目の屋嘉まりあと申します。今回、IPBAに初めて参加し、様々な刺激を受けるよい機会となりましたので、僭越ながら感想を共有させていただきます。参加を検討されている若手の先生方のご参考になれば幸いです。

ちょうどIPBAへの参加を決めた2022年11月頃、私は、もうすぐ3年目を迎えるというタイミングで、今後のキャリアや自分の専門分野について悩み始めていました。IPBAの話を聞いたときは、私のような若手が国際大会に参加してよいのか、参加しても誰からも話しかけてもらえないのではないかと不安でしたが、渉外法務に携わっていきたいという気持ち、国際大会に参加して自分のキャリアイメージを掴みたいという思いから、参加を決意しました。

そのような背景でしたので、今回のIPBAでは、幅広い分野のセッションにできるだけ参加すること、できるだけたくさんの方とお話しすることを目標にしていました。

まず、セッションについては、国際M&Aや知的財産法、破産に関するセッションなどに参加しました。具体的なセッションの内容については割愛しますが、普段業務をしている中では気が付かないような視点の議論や、先端分野の説明を拝聴し、大変興味深かったです。また、国際的に活躍されている日本人の先生方が、日本の実務について英語で流暢に説明されているところも拝見し、またとない経験となりました。

さらに、セッションの中には、20人前後しか収容できないような小さな会場で、パネリストと各国からの参加者が盛んに議論を繰り広げるようなものもありました。その議論の中心に自分と同世代の英語ネイティブではない弁護士がいる場面を目の当たりにして衝撃を受け、いつか自分も議論に入ることができるようになりたいと刺激を受けました。

全体として、今後自分がどのような法分野にフォーカスしていこうかを考えるよい機会になりましたし、英語力向上、現在の業務に対するモチベーションも高まりました。

社交イベントでは、普段あまり接することのないような国内事務所の先生方、各国の弁護士の方（私が出会った弁護士でいうと、イギリス、フランス、カナダ、アラブ首長国連邦、シンガポール、インド、中国、韓国、メキシコ、チリ、ブラジル等）と名刺交換をする機会がありました。私が最初に抱いていた懸念とは裏腹に、最終日にはドバイに持参した名刺の束がほとんどなくなってしまうほどでした。

海外の弁護士の方は、法律分野以外の話題を振ってくださる方も多かったです。これまでの海外旅行の経験、ドバイのおすすめ観光スポット、日本の観光スポットの話などをして、楽しい時間を過ごすことができました。来年、IPBA日本大会が開催されることもあり、日本に行くのが楽しみだと話しかけてくださる方も多かったです。

しかし、会話のスタート地点は、やはりお互いの専門分野の話題になることがほとんどでした。私は、現在取り扱っている案件を説明して何となくごまかしてしまいましたが、途中で質問されると答えに窮するような場面もあり、これから弁護士としての経験を積み、自分の専門性を高めることの重要性を痛感しました。そして、いずれは、文化面と法律分野の両面で、しっかりとコミニュケーションのとれるような弁護士になりたいと身の引き締まる思いでした。

また、IPBAとは少し離れますが、大会前後にドバイを観光することができたのもとても良い思い出です。ブルジュハリファをはじめとする近未来的な建築物、昔ながらのスークの街並みや壮大な砂漠の景色を見て、海外を訪問する楽しさを改めて感じました。

短い期間でしたが、非常に充実した時間を過ごすことができました。まだ自分のキャリアの答えは出ておりませんが、この経験を糧にして、今後も精進したいと思います。また、微力ながら、来年のIPBA東京大会のお役に立てるように努めてまいりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

プールテラスでのWelcome Reception

なんだ、この熱量は！

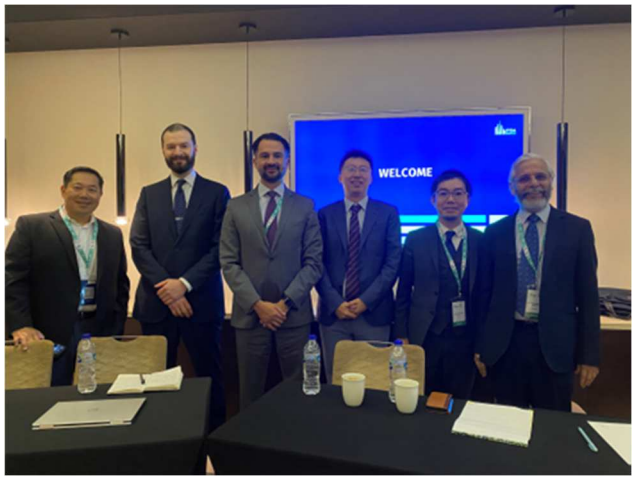
白井　紀充
（TMI総合法律事務所　名古屋オフィス）

1. はじめに

弁護士11年目にして初めてIPBA年次総会に参加させて頂きました。第一印象は、“なんだ、この熱量は！”。世界中から集うエネルギッシュな法律家が、最先端の法律トピックについて議論をしたり、時には法曹業界の将来について本気で語り合ったり、、

また、夜には、酒に酔いしれ、一緒に踊り、怖いあの先生もやっぱり人間なんだと再認識した夜、、コロナ禍で忘れかけていた人がまじりあい、ぶつかり合うことで生まれる熱量を目の当たりにした数日間でした。

コロナ禍を経て、海外の弁護士等とのやり取りを含め、様々なことがオンラインで出来るようになりましたが、約3年ぶりにひたすら人とリアルに会うという怒涛の数日間を過ごすことで、人とリアルで会うことで得られる情報の多さを改めて認識しました。それは、握手をしたときの力の入れ具合や周囲への気遣いといったちょっとしたことなのですが、短時間でもリアルで会うことで、オンラインで数時間話しても得られない「何か大切なこと」がそこにありました。



写真：筆者提供

2. 世界中の弁護士と議論を交わす

国際通商分野のセッションにパネリストの一人として参画させて頂き、インド、米国、中国、メキシコ、ベルギーの専門家と議論を交わす機会に恵まれました。扱うテーマが、米中対立を背景としており、非常にセンシティブであったにもかかわらず、準備段階から各パネリストの間では、皆臆することなく喧々諤々の議論を交わすことができました。これもIPBAに集う同士という信頼感が根底にあるように思いました。とても良い仲間と出会うことができ感謝しています。

また、海外の弁護士との交流に加え、日本の各事務所の弁護士との連携強化という点でもIPBAはとても貴重な機会であると感じました。普段は競争相手ということもあり、あまり接点のなかった先生方との間でも、オールジャパンでこれからの日本の法曹界をどうやって盛り上げていくのか、といった点を深く議論することができました。弁護士業務の国際化に関心のある弁護士が、忙しい合間にかなりの時間と費用を割いて参加していることもあり、それぞれの先生が持つ問題意識が大変鋭く、大いに刺激を受けました。

3. IPBAに参加する意義

私は、（特に若手の先生が）忙しい日々の弁護士業務の傍らIPBAに参加する意義は、海外の弁護士も所詮人間であり、自分と同じように笑い、悩み、必死に生きていることを肌で感じることだと思います。日本の弁護士はもっと海外で活躍できるポテンシャルを持っていると思いますので、ぜひ若手の先生にはIPBAに参加し、グローバルスタンダードに触れ、井の中の蛙になっていないか？と問いかけて欲しいと思います。自戒の念を込めて。。。

4. 最後に

来年の東京大会の組織委員として、東京大会のプロモーションブースのサポートもさせて頂きましたが、ブースに立ち寄られる方は、各々日本の魅力について語っていかれ、普段当たり前になっていて気付かない日本の良さを再発見しました。失われた30年、デフレ、高齢化等、後ろ向きなニュースも多い昨今ですが、日本の良さをどんどん発信していきたいと思います。

Hot、Hotter、Hottestの3つの季節しかないと言われるドバイですが、ちょうど大変季候が良い時期（おそらくHotよりも過ごしやすい）で、帰国のフライト前には、趣味のランニングをすることができました。すこし砂交じりの風にアラブの味を感じつつ、帰国の途につきました。

12年ぶりのIPBA

箕輪　俊介
（長島・大野・常松法律事務所　バンコクオフィス）

1. 2011年・京都大会ぶりの参加

前回私がIPBAの大会に参加したのは2011年の震災直後に開催された京都大会であり、実に12年ぶりの参加であった。図らずして、今回のドバイ大会に参加するまでに夏季オリンピックが3大会開催されるほどの月日が流れてしまい、前回参加した大会では意気揚々とyoung lawyer枠の恩恵を賜っていた私がyoung lawyer枠の適用など到底口にできない年齢（絶賛後厄中）になっており、今大会の登録時にも時の流れを実感させられたが、過去に参加した2010年シンガポール大会、前述の京都大会のことは鮮明に憶えており、またこのイベントに参加したいという思いは常に持っていた。コロナ禍を経て、ようやく積年の思いを果たし、IPBAの大会に戻ってくることができた。

2. No maskのドバイ

今回は、私にとってはじめてのドバイ、はじめての本格的なイスラム国での滞在であった。アラブの国に行くにあたり、髭を生やして参加したいという思いがあったものの、ドバイ入りの数日前にうっかりいつもの習慣で髭剃りをしてしまい、髭ありでの参加を断念したことはここだけの話であるが、ドバイの空港に着くにあたってまず洗礼を受けたことは空港を行き交う人が誰もマスクをつけていないことである（当然、髭も目に入る）。

私が現在滞在しているタイ・バンコクでは2023年3月当時の状況は日本のその時期と似ており、公の場でマスクを着用しなければならないというルールはないものの、多くの人が外出の際にはマスクを着用していた。そのため、誰もマスクを着用していない光景は新鮮であり、改めて異国に来たことを実感した。郷に入れば郷に従えで、髭ありでの滞在は断念したものの、私も滞在中はマスクをせずに過ごした。マスクなしでの生活は心地よく、人の表情をみてコミュニケーションを取ることの大切さを再認識した。マスクあり勢が多数派である当時のタイに戻った後も、マスクありでの生活には戻れず、マスク無しでの生活を導入したことはいうまでもない（当時のタイでの感覚でいうと、ドバイ帰りにもかかわらず、マスクをせずにオフィスにてうろうろしている私は同僚の人からは恐怖の対象であったのだろう。同僚の皆様にはこの場を借りてお詫びしたい）。

Gala Dinnerにて　写真：筆者提供

3. 本大会の雰囲気

本大会は、12年前の記憶と変わらず、活気に溢れていた。2020年にコロナ禍が発生してから長くの間、大規模な国際大会を開催することは難しい状態が続いていた中、世界各国から仲間が集まる形での開催は実に4年ぶりということもあり、久しぶりの再会を楽しみ、旧交を温めている人や、新たな出会いを楽しむ人で溢れていた。私も含めて本大会を心から楽しんでいる大勢の人を見てこのような国際大会の大切さを再度実感した。

日中の白熱した議論から夜深い時間までのネットワーキング、これほど多くの弁護士が一堂に会し、各国の最新事情の情報交換を行い、異国の場で密度の濃い時間を共有できる場はそうそうない。

本大会の準備は、まだまだコロナ禍の先行きが不透明な中に進められたものと推察する。その苦労は人並みならぬものがあったと思うが、このような場を準備してくれた方々には改めて感謝を述べたい。

4. 来年の東京大会に向けて

今回の本大会の成功をみて、来年の東京大会はより多くの人が参加してくれるものと確信した。4月という一年でも最も過ごしやすい時期に、多くの友人と日本で再会できることは今からとても楽しみである。多くの参加者が滞在を楽しんでもらえるように、私も来年に向けて何かお手伝いできることがあれば微力ながらも貢献したい。

IPBAドバイ大会での思い出

小西　菜穂子
（Pavia e Ansaldo ミラノオフィス）

Pavia e Ansaldo（パヴィア・エ・アンサルド）というイタリア系法律事務所のミラノオフィスに所属しております、小西菜穂子と申します。2016年より度々参加させて頂いており、この度、日本IPBAの会ニュースレターへの執筆のお声掛けを頂き、僭越ながらドバイ大会に参加した感想や思い出などを述べさせて頂きたく存じます。

新型コロナウイルスの呪縛からようやく解放されての参加とあり、コミュニティーからの連絡を拝見しながら楽しみにしておりましたが、現地に到着後、手配ミスにより肝心の大会への参加申込手続きを完了していなかったという大失態が判明いたしました。メールを通じてのLate registration手続きもオンサイト登録手続きも難しいということでしたので、数名の先生にイベント外で個別に一瞬ご挨拶させて頂いた後、旅程を変更してミラノに戻ろうと思っておりました所、お力添えを頂きましたお陰で、特別にオンサイトで参加登録申請を受理頂き、途中から無事にセッションにも参加することが出来ました。未登録の状態であったにもかかわらずJapan Nightへの参加を認めて下さった先生方、本件につき助けて下さった皆様方に、心より御礼申し上げます。

本大会のセッションの特徴として、時節柄、場所柄、国際情勢などに影響されて不安定になっているエネルギー、ESG、（ポスト）コロナ、暗号資産に関するテーマのものが多かったようにおもいます。わたくしは、情報収集という観点から、全てばらばらなテーマのセッションに参加することにいたしました。不安定な行く先が不透明な状況が尚続いております中、現状における各国の政府の支援・対応、法制度、実務面での対応、データ等をタイムリーに知ることが出来、更に、目から鱗が落ちるようなスピーカーやモデレーターや質問者の視点、補足説明、問題提起その全てが大変勉強になりました。

セッション外では、各国の状況、法制度のしくみ、新しく導入された制度、そしてクロスボーダー取引でとても重要となる各国の政府当局の姿勢、国民性、文化、流行っているものについても意見交換いたしました。

国民性や文化といいますと、ドバイ首長国は、人口構成が外国人9割という、民族的、文化的にも世界で最も多様性のある国の一つとされております所、かなり昔に一度仕事で絡みがあったことがあったものの、近いながらも遠い国といったイメージが強く、トランジットで度々ドバイを通過する程度で、滞在するのは初めてでした。この短期の滞在の期間中に、どうにか現地の様子も伺ってみたいと思っていましたので、欧州その他の国への赴任を経てこのタイミングで、ドバイに赴任している知人にも連絡を取り、この国ならではの特徴や今遭遇している問題等を伺うことも出来ました。

流行っているものとして、ChatGTPの話題で盛り上がりました。わたくしは使用したことが無かったので、是非イタリアに戻ってから試してみます、と返してドバイを後にしたのですが、程無くイタリア当局が一時ブロックしてしまうという事態に発展し、後日世界的に注目されることとなりました。現地でこの話をした先生からはイタリア当局の姿勢等ご質問を頂き、この話題をきっかけにその後も交流させて頂いております。

最後になりますが、本大会に関わられた全ての皆様にお礼を申し上げます。皆様のお陰でとても楽しむことが出来ました。そして、本大会への参加をかなえて下さった皆様に、改めまして心より御礼を申し上げます。

来年東京で皆様にお会いできますのを、今からとても楽しみにしております。

Scholar's Report

サボナイ・リッキ・アリンゴ
（瓜生糸賀法律事務所・外国法務弁護士）

ドバイのJWマリオットホテルで開催されたIPBA年次大会に奨学生として参加したことは、信じられないほど豊かな経験となり、本当に感謝しています。様々な地域における法律に関する最新の情報を知る機会を与えられながら、各地域の著名な法律家やIPBAのシニアメンバーと知り合いになれただけでなく、多くの新しい友人もできました。次の東京での大会で再会できることをとても楽しみにしています。

大会の前日に、奨学金委員会の企画としてドバイの法律事務所Hadef&Partners、Al Tamimi & Company、およびDubai International Financial Centre（DIFC） Courtを訪れる機会をいただきました。他の奨学生の方々と知り合い、ドバイの一流の現地弁護士と交流しながら、UAEおよびドバイ独特の法制度についてより詳しく学ぶことができたので素晴らしい経験でした。私にとって親しくなかったDIFC Courtですが、同裁判所のアリ・アル・マドハニ裁判官との会話を通じて、「未来の裁判所」イニシアティブについて洞察に富んだ情報を得ることができ、紛争担当の弁護士の私にとっては非常に有益な経験でした。その日、様々な交流会に参加し、メンバーの皆様からIPBAへの暖かい歓迎を受けました。

その後3日間にわたり多様なテーマの委員会セッションに参加する機会がありました。私が参加したセッションは、少数株主保護、決済システムの動向と規制、ESGと国際仲裁、紛争解決とメタバース、次世代弁護士を目指す、などのテーマについて協議されました。いずれも興味深く、有益なものばかりで、クロスボーダー紛争弁護士として扱う様々な案件に役立つ新しい見識や視点を得ることができました。セッションとそれに続く協議は、それぞれの法域におけるベスト・プラクティスと法的発展を共有するための素晴らしい触媒だったと思います。

また、委員会セッション以上に、私がこの大会で最も感謝しているのは、他の奨学生やIPBAの先輩方との親睦やネットワーキングの機会が豊富にあったことです。歓迎会、Japan Night、ガラディナー、送別会（バージュアルアラブを望むジュメイラビーチホテルにて）、そして短いコーヒーブレイク、朝食、昼食、夕食を皆様と共にすることは、私にとってこの大会の最も楽しいところであったと思います。そのおかげで私たちはお互いに緊張せず、個人的につながり、有意義な議論を交わしながら特別な時間を楽しむことができました。

本イベントをとても丁寧に計画したIPBA ドバイ組織委員会に心から感謝申し上げます。また、IPBA 日本ファンド、IPBA事務局、奨学金委員会のメンバーにもお礼させていただければと思います。IPBAの奨学生の一人としての機会を与えていただき、大会中のご配慮を非常にありがたく思います。

ドバイのIPBA大会のおかげで、私の専門的な道程に一生忘れられない印象を残し、英明な専門家でできた貴重なネットワークを広げることができました。この地域で活躍する国際弁護士の仕事の価値をより深く理解する機会を与えてくれました。この大会で得た教訓と繋がりを通じて、より良い弁護士になり法律業界およびIPBAへの貢献をさらに増やしていくことを目指したいと思います。

記事中の写真：筆者提供

IPBA 32nd Annual Meeting & Conference
2024年東京大会のご案内

日時　：2024年4月24日（水）～ 27日（土）
テーマ：New World, New Wisdom
会場　：ホテル　オークラ東京
会議詳細・参加予約は公式ウェブサイトから
www.ipba2024.com

2024年12月31 日まで*Early Bird割引登録受付中*です。ぜひお早めにご登録ください！

＊最新の情報は東京大会ウェブサイトでご確認ください。

＊日弁連の若手会員参加補助制度については、日弁連またはIPBA事務局までお問い合わせください。